ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　今日から俺達が通う学校、『中等教育学校』は、中等という名前の通り、公立の中高一貫校である。まだ創立二十年たったかどうかだが、周りからは『中等』又は『中等』と呼ばれ、『地域住人との交流を中心に、学生の自立心と向上心を伸ばす』という教育方針に恥じぬ授業の甲斐あって評判はいい。今年の一月に俺と樹葉はここの入学試験を受け、三倍という高い倍率を勝ち抜いてこの学校に入学した。まぁ、お姉様からの指示でこの学校に入ることになっているゆえ、落ちるわけにもいかなかったので、俺としては嬉しい気持ちよりも安堵した気持ちの方が強い。

「一緒のクラスになれるといいね」

　生徒玄関の前に貼られているクラス分け表から自分の名前を探しながら、樹葉はなんだか楽しそうな顔で言う。一緒に暮らしているので、同じクラスの方が色々と都合がいいのは確かだ。とはいえ、

「たった三クラスしかないんだから、クラスが離れても困らないだろう」

　一クラス二十数人で、それが三クラスあるから一学年七十人弱しかいないので、他の一学年三百人以上とかいう驚きの生徒数を誇る中学校と比べれば、クラスが離れていることのデメリットはあまりない。実際、洲王中等では六年間一緒の仲間と過ごすことも相まって、学年の横の繋がりが強いそうだ。クラスの垣根はあって無いようなものだとか。

　まあ、垣根が無いのは、別にそれだけが理由って訳じゃないのだが。

　それに、と俺は言葉を続ける。

「お姉様からしてみれば、むしろ俺達はクラスが別々の方がいいんじゃないか？」

　そう言いながら、俺は周りを見渡す。

　新入生は少ないものの、それでも結構な人数が生徒玄関の前のクラス分け表を覗き込もうと集まっている。その中には俺も見たことのある人もいて、そいつらは全員『ワルキューレ』のメンバーだ。クラスの垣根が無いというのは、これも理由の一つである。この学校の全校生徒の三割は『ワルキューレ』に所属しており、また理事長も『ワルキューレ』の人間で、この学校を建てたのは先代のお姉様だ。ようするにこの学校は、『ワルキューレ』メンバーの養成も兼ねている。というよりも、そっちが目的だ。いや、今はそれも目的の一つ、というべきか。近年、とある問題が増加しているからである。

当然、この学校には『ワルキューレ』の人間か、一般人しかいない……と言えればいいのだが、現実はそう上手くはいかない。実はこっそり、他のチームのメンバーも紛れている。もちろん入学試験の前に念入りにチェックしているものの、俺が『ワルキューレ』の外では『仲間友絆』と名乗っているように、他の奴らも偽名を使っているため、中々見分けるのが難しい。対策としてチェックもさらに厳重にしているらしいのだが、思いの外効果が無いようで、上は頭を抱えている。そこで多少の危険はあるが、元々は希望制だったのを、他のチームの連中を炙り出すのに、任務という形で俺達も入学することになったのだ。さすがに、一般の生徒を押しのけるような、裏口入学みたいな真似はお姉様が許さなかったらしいが。

　なので、そういった側面から見れば、俺と樹葉は別々のクラスの方が都合がいい。それは隣でなぜかちょっと膨れて俺を睨んでいる樹葉も分かっているはずなのだが……一体何がどうしたというのだろうか？

「……ん？　どうした？」

　一応聞いてみるが、樹葉は何も言わず、再びクラス分け表に目をやる。仕方ないので俺も、自分の偽名である『仲間友絆』という文字を探すべく貼られている紙に目をやるが、自分の名前を見つける前に、樹葉の偽名である『』が目に入った。

「お前は三組みたいだな」

「友絆は二組……あんなこというから、クラス別れちゃったじゃん」

「それは、俺のせいじゃないだろう……」

　再び可愛く膨れてみせる樹葉に溜息をつきながら、俺は自分の名簿番号を確認し、生徒玄関に入る。全校生徒数は五百人もいないので、正直、玄関は狭い。全部で四つある下駄箱同士の間は人が二人通れればいいほうだろう。今時珍しい木製の下駄箱は、所々茶色の塗料が剥がれて、木本来の薄いベージュ色がわになっていた。

　俺は二組で名簿番号は『１３番』なので、下駄箱は俺から見て一番左側の列の、真ん中あたりの棚にあった。ちょうど俺の目のちょっとした位の位置にあったので、靴は入れやすい。

　下駄箱に靴を放りこんで廊下に出ると、右に行けば体育館、左に行けば教室だ。ここらへんは、入学試験の時に来ているので覚えている。体育館では、上級生の方々がせわしなく動いてパイプ椅子を並べていた。

「友絆、どうしたの？」

　後ろから声をかけてきた樹葉。俺は、上級生の何人かはブレザーを脱いで、白いワイシャツで椅子を並べている姿を見ていた。あれを見る限り、どうやらブレザーは脱いだまま過ごしていても構わないようだ。冬場は流石に寒いだろうが、それ以外の季節は、少なくともあのブレザーから血の色を連想することも……いや、もちろん他の人が着ているので、視界からシャットダウンすることはできないか。まあ、それでも自分の着ている服の色があの色でないだけ、幾分マシである。

「何かあった？」

「いや、何でもない。それより、早く教室行こうぜ」

　首を振って俺は、樹葉と一緒に教室に向かう。入試の時は緊張のあまり気がつかなかったが、廊下は大理石で中々珍しい。『研修所』を彷彿とさせ、俺は中々に複雑だ。あそこは楽しかったところでもあったが、友達に裏切られたところでもある。

　そういえば俺は、樹葉やレイ、詠がどのような経緯で『研修所』に入ったのか知らない。俺自身は『研修所』に入ったことを後悔はしてはいないが、果たして皆は『研修所』に対してどう思っているのだろうか？　『研修生番号』から自分の名前を決めたくらいだから、悪くは思っていないのだろうが、ちゃんと聞いたことはない。俺も自分がどういった経緯で『研修所』に入ったのか話してないし、なんとなくだが、気軽に話していい、聞いていい話では無いような気もする。一緒に暮らしていて、レイ達もその話をしないところをみると、どうやら暗黙の了解というやつなのだろう。

　一階は、教務室や進路相談室、その他もろもろの特別教室だったりするので、普通の教室は二階にある。綺麗に掃除された階段を登り、右に進むと、俺達の教室である、『一年二組』と『一年三組』のプレートが見えた。手前が二組、奥が三組だ。

　俺は、後ろからついてきている樹葉に振り向く。

「そんじゃ、後は『呉服屋中村』で」

「……うん」

　何か複雑な顔をした樹葉を不思議に思いながら、俺は自分の教室へと入った。

　教室には、もうすでに、結構な数の人がいた。友達グループも、もう出来たところもあるらしい。黒板に目を向けると、上級生からの歓迎の言葉が、スペースのほとんどを埋めていた。

　俺は黒板に貼られている、席順が書かれた紙を見て、そこに向かう。机は縦四つの横六列の計二十四個あり、俺の席は、入口から三列目の、黒板から二つ目のところにある。隣の席の人は、もう既に来ていた。男だ。周りが新しい環境ではしゃぐ中、そいつは文庫本を読んでいる。

　それでも、俺が自分の席に鞄を置くと、文庫本に落としていた目を、こちらに向ける。途端、ニッコリと笑顔を見せた。そして、本を閉じる。

「あー、俺、っていいます。よろしく」

「……仲間友絆です」

　こちらに差し出された手に応じながら、俺は会釈する。なんだろう。ちょっと馴れ馴れしい気がする。声は小さいが、腹から声が出ている時特有の力強さが、そう感じさせるのだろうか？

「隣の席なんで、仲良くしてください。あ、趣味は読書なんで、オススメの本があったら、教えてください」

「あー……はい」

　あまり本を読まない俺としては、仲良くなれそうな気はあまりしないが、取り敢えずそう答えた。

「……あっ」

　ふと、俺は大事なことを忘れている事に気が付く。そういえば、ここには任務で来ているのだ。今、隣にいる日ノ下が、別のチームに所属する人間なのか、それともただの一般人か、確認する必要がある。ならば、多少は観察しておいた方がいいだろう。難なら接触して、探ってみるべきかもしれない。これは、他の人達にも言えることだ。

　俺は、日ノ下を一瞥する。容姿は、ミディアムヘアのウルフカットが、彼の顔を覆っていて、いかにも男の子といった感じだ。少なくとも、俺や詠のように、線が細いわけじゃないのが羨ましい。ちょっと細めな目と、薄い唇に――なんというか、こう――男性的な魅力がある。多分、こういうのをセクシーというのだろう。中々に女子にモテそうだ。

彼は、再び読書に没頭していた。表紙は布製の青いカバーで隠されているため、どんな本を読んでいるのかは分からない。ただ、時折アニメチックな挿絵が見えるところが見えるので、多分そういった本が好きなのだろう。今度、調べておくか。

　そんなことを考えていたら、先生が入ってくる。他の生徒も観察したかったが、どうやらここで、その時間は終わりのようだ。時計を見れば、そろそろ入学式が始まる時間になっていた。

　退屈な入学式も終わり、さらに、その後のホームルームも終わる。自己紹介は結構緊張したが、名前で笑われずに済んだのは良かった。

　今日はこれで終わりなので、俺は鞄を手に取って、席を立つ。そして、忌々しい色のブレザーを脱いで、手に掛ける。さすがに入学式中は羽織っていなければならなかったが、生徒が皆あの色のブレザーを着用していたので、終始、ちょっと気分が悪かった。これは、全校集会の時とかは大変そうだ。何か、対策を講じておく必要がある。

　こんなことなら、いくら任務とは言え、お姉様に頼んで別の学校にしてもらえば良かった。

「……どうかしたの？」

　それまで読書をしていた日ノ下が、気遣わしげな顔で、俺に聞く。そこで俺は、どうやら、つい溜息を吐いていたらしいことに気がついた。

「いや、何でもないよ」

「そういえば、入学式中、ずっと顔色が悪かったけど、大丈夫？」

　……日ノ下はちょっと、詳しく調べてみる必要がありそうだ。ひょっとしたら、他のチームの人間かもしれない。なんでそんなところ見てんだよ。

「平気だよ。生まれつき、体がちょっと弱いんだ」

　こういう心配をされた時、小学校からずっと使っていた言い訳を、俺は口に出す。それを聞いて、一応は納得したのか、日ノ下は再び文庫本に目を落とした。

　さて、何はともあれ、俺にも任務がある。時間にはまだ余裕があるが、さっさと行って、さっさと終わらせよう。いや、その前に、家で着替えないとか。

　背中から聞こえた、日ノ下の「じゃあ、また明日」という声に適当に返事をして、俺は教室を出ようとした。

その時、ふと周りを見渡すと、生徒と生徒の保護者が、教室だけでなく廊下にまでごった返していることに気がついた。他の一年生の教室も、似たような感じだ。ちなみに俺には当然、入学式を見に来てくれる人はいない。俺だけでなく樹葉や、学校は違うけど、詠やレイにもいない。お姉様が来ると言って聞かなかったそうだが、あまり目立つと問題になると周囲の人達に反対され、結局来ることが出来なかった。マルクスさんも忙しいので、来てくれとは頼みづらい。一応、先輩方が見に来ることはあるけど、彼女達も自分の事で忙しいだろうし、何より『保護者』って感じじゃないから、来て欲しいと頼みに行くのもなんかアレだ。

　自分が何を考えているのか、だんだん分からなくなってきて、俺は足早に玄関へと向かった。